

特別寄稿

RB 100 in New York 参加報告

金子 明博(上福岡駅前アイクリニック)

A Report concerning RB 100 in New York

Akihiro Kaneko (Kamifukuoka Ekimae Eye Clinic)

日本眼腫瘍学会誌

Journal of Japanese Society of Ocular Oncology

Vol.4 (Sep. 2015)

(2015年9月15日発行 別刷り)

特別寄稿

RB 100 in New York 参加報告

金子 明博(上福岡駅前アイクリニック)

A Report concerning RB 100 in New York

Akihiro Kaneko (Kamifukuoka Ekimae Eye Clinic)

【要約】

2014年9月18～19日にニューヨーク市の Memorial Sloan Kettering Cancer Center で開催された、1914-2014 : Celebrating 100 Years of Our Retinoblastoma Center in New York (ニューヨークでの網膜芽細胞腫治療100年を記念した集会)に参加したので報告する。世界19カ国から約200人の網膜芽細胞腫に関係した医療関係者が集まり盛会であった。網膜芽細胞腫の治療では局所化学療法が先進国では主体となっているのを目の当たりにして、創始者として大変感慨深いものがあった。

Key word : 網膜芽細胞腫、メモリアル・スローン・ケタリング癌センター、アブラムソン教授
Retinoblastoma, Memorial Sloan Kettering Cancer Center, David H. Abramson

旧知の友人であるニューヨーク (NY と略す) の Memorial Sloan Kettering Cancer Center (MSKCC) 眼科の David Abramson 教授 (A と略す) が主催する 1914-2014 : Celebrating 100 Years of Our Retinoblastoma Center in New York の祝賀講演会が2014年9月18日と19日に開催され、わが国では私だけが参加したので報告したい。

A は NY の RB の治療センターである MSKCC3代目の責任者である。初代は Allergen Reese で Tumor of the Eye の名著で著名な眼科医で、筆者も医局の図書室にある、美しいカラーの図版の多い本書を愛読し、当時眼腫瘍研究者の間ではバイブルのような存在であったことを記憶している。二代目は Robert Ellthworth で、網膜芽細胞腫の眼球保存療法の難易度を示す Reese-Ellthworth 分類にその名が残っている。東大眼科医局に在籍中、NY に出かける折があったときに、東大眼科の先輩で Columbia 大学の眼科で、病理の教授をされていた岩本武雄先生に紹介をお願い

して彼の診療を見学させていただいたことがあった。手術室にある彼の更衣室のロッカーのうち扉に、裸体で、上半身が女性で下半身が男性の大きなカラフルな絵が張ってあったのを垣間見たことが鮮明に思い出される。彼の学会での発言で記憶に残っているのは「良い研究のアイデアは隠さずに話そう。何故なら、人は何時死ぬかは分からないが、他人に伝えておけば、本人が死んでも、後に続く人が実現することが出来て、世の中の役に立つ。」との主張である。彼は肺がんで比較的若いうちに亡くなったが、私も彼に習い、まだ実現可能か否か不明なアイデアを隠さずに話すようにしている。

1992年に、A の奥様が米国で第一の広告会社の顧問弁護士であった関係で、東京で会議があり、A が配偶者として同行した。東京では彼は暇なので、あらかじめ私に連絡があり、国立がんセンター中央病院を来訪した。当時マイクロウェーブを使用する眼球温熱療法をしていたので、アプリケーションをお見せした。

Retinoblastoma Management

- Advanced course
- “Pearls”
- Treatment in 2014
 - >40 week, International
 - No systemic chemotherapy (>3mos) in 8 years
 - <1% transfusion, F/N
 - No ports
 - No primary EBR in 10 years
 - No periocular Carboplatin in 10 years

Abramson 教授の示した MSKCC における網膜芽細胞腫の現在の治療状況。

彼が開発した carboplatin のテノン注射は10年も前に使用していないことが判明した。

彼はオランダで開発されたこの方法についてよく知っており、温度の分布の再現性について疑問視していた。当日のディナーとして夫妻の御希望が中華料理だったので、銀座の福臨門酒家で夕食をご馳走した。その返礼として翌年のゴールデンウィークに彼の施設を見学させてもらうこととなり、セントラルパークウエストにある彼のマンションにホームステイさせてもらった。ビートルズで有名なオノ・ヨーコのパートナーであるジョン・レノンが暗殺されたダコタハウスの直ぐ近くで、ピストルで射殺されたときの銃声を A は覚えているそうである。彼のマンションの建物の造りは歴史を感じさせてやや薄暗いが、有名な高級マンションで、近くにあるメトロポリタンオペラハウスで白鳥の湖を鑑賞させていただき、週末は1人で自由行動をしてセントラルパークで野鳥観察や美術館や博物館を堪能した。彼のオフィスに勤務する看護師は眼腫瘍に特化した看護師を目指しており、学会活動や論文発表も行い、米国における看護師のレベルの高さに感心した。

さて、NY での祝賀講演会は MSKCC の研究施設のある大きな講堂で、世界から約20カ国、175名が集まり開催された。参加費は無料で朝食と昼食は講堂に接した広い廊下で供された。

まず MSKCC の最高責任者である Craig Thompson による祝辞のあと、A が眼科の三代に亘る歴史を回顧する講演があった。次に世界の著名な RB の臨床医や研究者36人による10分ずつの症例報告が行なわれ

た。各国を代表する臨床医だけあり、大変興味深い症例が多かった。

私は世界で最初にメルファランの内頸動脈注入で治療した27年前の症例の治療前と27年後の状態について報告した。12月に出産予定であり、メルファランの副作用で心配されている不妊症の心配が無い事が明らかに出来た。

他の演者の症例の一部を列挙すると、Abramson：RBの眼窩内転移に対する眼動脈注入による治療、Munier：メルファランの後房内注、Marr：松果体以外に発生した三側性RB、Shefler：眼動脈注入や全身化学療法(VEC)に殆ど反応が認められなかったRB、Kim：メルファランを50mg硝子体注入して網膜中心静脈閉塞を発症した症例等である。

次はパネルディスカッションで、有名な医師が4～5名パネリストとなり、Aが事前に提示してあった症例をどのように治療すべきかのパネリストによる発表があり、次にAがその症例をどのように治療して、どのような結果であったかを見せて、討論が行われた。

私がパネリストとして指名された症例をお見せする。

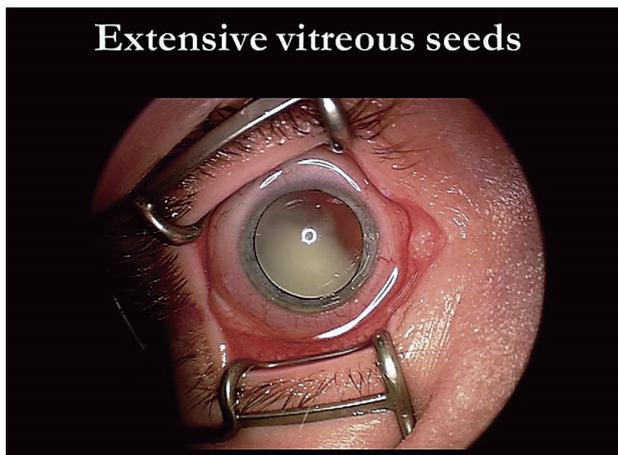
- 17yo female with bilateral retinoblastoma
- s/p/ Enucleation left 16 years ago (Left)
- s/p EBR 15 years ago (Right)
- Maintained 20/20- (Aphakic)
- Floaters x 1 year
- Recurrence found, Vision 20/30
 - MR, BM, LP normal (home)

症例：17歳、女性、両眼性RB

16年前に左眼球摘出、15年前に右眼に放射線外照射20/20の矯正視力を維持してきた(白内障手術後)1年前に浮遊物(複数)を自覚し、RBの再発が認められた、視力は20/30、MRI、骨髄検査などに異常なし

治療の選択肢 その問題点

- 1) 眼球摘出 …… 唯一残された眼球の、視力の良好な眼。
- 2) 放射線外照射 …… 再照射となる
- 3) 全身化学療法 …… 外照射後、硝子体播種



How would you treat this patient?

Treatment Options	Issues
■ Enucleate?	(Only eye-good vision)
■ EBR	(Second time)
■ Systemic chemotherapy	(Prior radiation, seeds)
■ Plaque + I Vit	(Prior radiation, extensive seeds, pars plana seeds)
■ OAC	(? Appropriate)
■ Others	

- 4) 小線源治療 + 硝子体注入 …… 外照射後、広範囲の硝子体播種、扁平部の播種の存在
- 5) 眼動脈注入 …… 適当 (?)
- 6) その他

私はメルファランの眼動脈注入と硝子体注入を行い、必要ならメルファラン灌流下での硝子体手術を提唱した。Aの行った治療もメルファランの眼動脈注入と硝子体注入で、それで完治したとのことであった。

夕方からはハドソン川での観光船クルーズと船内でのフルコースのディナーを着席で提供された。本会は参加費が無料で、朝からの食事も無料で、このエクスカージョンも無料で、主催者の経済力の豊かさに関心させられた。晩夏のNYのハドソン川の夕方の心地よい風を感じて、長年学会で顔なじみの人々ばかりなので、和やかな雰囲気であった。MSKCCで眼動脈注入を担当している Gobin 先生が、私とのツーショットの記念撮影する時、私が最初で、彼が二番目であるから、私が指を一本示すように言われた。私に花を持たせてくれる心使いに感心した。



Gobin 医師とハドソン川のクルーズ船で。彼の提案で私は指1本、彼は2本立てた。

この会では網膜芽細胞腫の眼球保存治療は先進国では殆ど、我々日本人が開発した局所化学療法を第一選択として使用している現実を目の当たりにして、大変感慨深いものがあった。元国立がんセンター病院院長で胃の二重造影法を開発された市川平三郎先生が、常日頃、「本当に革命的な仕事は、世界的に認められ普及するのに30年かかる」と言われていたことは真実であることを再確認した次第である。